



『スパークス 日本株長期投資のすすめ』

スパークスの株式投資、株式市場などに対する見方を紹介するコラムです。

第20号(2008年7月18日)

「長期投資における複利効果の大きさ」

投資を開始して一定期間が経過すると、利息、配当、分配金などといった形で利益が分配されることがあります。利益をそのまま受け取る場合と、その利益を元の投資に上乗せして追加投資していく場合とでは、特に投資期間が長くなればなるほど、運用成績に大きな差が出ます。今回は、運用成績に大きな差を生み出す複利効果についてお話したいと思います。

具体的な数字を使ってご説明させていただきますが、ここでは毎年5%ずつ価格が上昇し、毎年利益の全てを分配金として払い出すと仮定した投資信託に100万円投資する場合を想定します。また簡略化のため実際の取引で発生する一切のコストを無視します。まずは、毎年5%価格が上昇する投資信託に100万円投資し、分配金をそのまま受け取って手元においておく単利の場合を見てみましょう。5年後の資産残高は、期初の投資金額100万円に分配金の25万円（元本100万円×5%×5年間＝25万円）が加わって125万円となります。

次に、毎年5%価格が上昇する投資信託に100万円投資し、分配金を追加投資していく複利の場合を見てみましょう。1年目は100万円を投資するので1年後の資産残高は105万円です。2年目は利益の5万円を加えて105万円を投資するので、2年後の資産残高は110.3万円となります。このように利益を追加投資していくと、5年後の運用資産残高は、127.6万円（元本100万円×(1+5%)⁵=127.6万円）となります。単利の場合と複利の場合の資産残高の差は2.6万円ですから、それほど大きな差になっていないと思われるかもしれませんが。

しかしながら、これを誤差の範囲に過ぎないと考えてはいけません。運用期間が長くなればなるほど、複利効果はより大きくなります。単利と複利で運用した場合の資産残高を比較すると、その差は10年後で12.9万円、15年後で32.9万円、20年後で65.3万円、25年後には113.6万円、30年後には182.2万円となります。運用期間がおおよそ10年を超えてきたところで、その差は加速度的に拡大していきます。複利効果の観点からも、長期投資が資産形成にきわめて有効な手法であることがお分かりいただけたのではないのでしょうか。

(注) 本コラムは、マネックス証券Web-Site「マネックスラウンジ」の「マネックスメール」に掲載されている「スパークス・アセット・マネジメントの『SPARX Way』」をもとにスパークスが作成したものであります。



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。